

## ラフカディオ・ハーンと逸脱のエートス

渡 辺 忠 夫

ラフカディオ・ハーン文学の特異性を模索するための根源的土台はつぎの視点の解析にあるように思われる。

How frightful to have to live altogether according to the proprieties! I'd rather die. Everything charming in life, as in Japanese art, is Irregularity and Eccentricity. The Perfect Regular, the Mathematically Collect, is barbarism, and cruelty. Nay, it is a violation of all Natural law: for all tendencies to evolutionary progress come. In the shape of invisible tendencies to deviate from the common herd.<sup>(1)</sup>

この視点は西欧近代文学をつちかったルネッサンス文芸の合理主義、遠近法、均一性、統一性、対称性と正反対の理念と言えよう。つまり、ハーンの主導する文学は“Irregularity”, “Eccentricity”を注視し、“barbarism”, “cruelty”から脱却することにあるとの提言と解釈できる。

問題となるのは、ハーンが何故このように逸脱し、過激なエートスをいだくようになったかである。

周知のようにハーンはアイルランド出身の軍医でプロテスタントの父 Bush とイングランドの保護下にあったレフカダ出身のギリシア正教の母 Rosa との間に生まれた“hybrid”であった。宿命の混血児と言えよう。

2才まで本国に召還され、しかも転任の連続のため父不在のまま母子だけで島で暮らし、慣習に従いギリシア正教の洗礼をうけた。母と父の弟にとまなわれ異界のアイルランドのダブリンに渡った。2才の時である。3才ではじめて戦地からもどった父と対面した。異常であろう。もう一つの異常は父が母との結婚をロンドンの陸軍省に報告していないことである。なぜなのか。父の家の宗教はプロテスタントである。ギリシア正教の母子とは慣習、風俗、教養、信仰があきらかに異なる。母子はしだいにハーン家のなかで孤立し、よそ者、はみ出し者となっていった。しかも4才の時父はクリミア戦争に従軍するためダブリンをまたもや離れる。家庭不在ハーン家でよそ者となった母子は祖母の妹にあたる富裕で未亡人の Sarah, Brenane の館に寄宿することになる。ハーン家ではプロテスタントから改宗した厳格なカトリック教徒である。母はギリシア語はもとよりアイルランド語、イングランド語も正規の教育を受けていなかった。ギリシアでは女性の文盲はめずらしいことではない。しかし、2才までのハーンに夜話を語って寝かせるすべは巧みであった<sup>(2)</sup>。4才の時、母は妊娠しギリシアにもどり再び帰ることがなかった。夫婦生活がすでに破綻していたものと思われる。

7才。父母はともに再婚している。父は母との結婚を無効として申告し、認可され、離婚が成立し

た。異常であろう。すでに記述したように母との結婚を陸軍省に提出さえしていなかった。再婚の相手はギリシアに赴任する前に求婚していたが、反対されていた Alicia Crawford である。アイルランド出身で未亡人となりオーストラリアからダブリンにもどって来ていた。再会し、結婚し、インドにまたもや赴任し、以後、二度と会うことがなかった。

ついでながらブレナン夫人は父母の離婚に反対し、Bush を遺産相続人からはずしている。異常である。はき出され、部外者になったハーンはいわばブレナン夫人の“養子”となり13才までアイルランドで初等教育をうける<sup>(3)</sup>。

13才でイングランドの“Durham” 近くのカトリックの St. Cuthbert College に入学した。ブレナン夫人がハーンを“養子”にしたのにはカトリック教徒、神父にするためであったと推測されている。この推測はすでに他で論じているので今は省くことにしたい。結論を述べればハーンは改宗教者、ローマ・カトリック教徒で保護者の意図とは逆にカトリック信者になる意図はまるでなかったと言えよう。反逆すらいだいていたと思われる。

しかもカトリック修道女になろうとする Jane 叔姉の後を、好奇心から二階について行くと、たまたま振り返った彼女には顔がなかった。のっぺら坊である。

She had no face. There was only a ple blur instead of a face. And even as I stared, the figure vashided.<sup>(4)</sup>

ハーンは生来、“dogmas”, “creeds”, “regularity” をうけつけないエートスがそなわっていたと言っただけであろう。しかも16才になった時、思いがけない不幸に出会うはめになった。“Giant Stride” の遊びで左目にロープの結び目があたり、ダブリンで手術した。しかし、回復せず失明し一生悩まされつづけた。

不幸はなおも続いた。ブレナン夫人の破産の報告である。報告者は Molyneux, Henry Hearn である。破産をさかいにハーンの保護者、管理人となるのがモリニュークスである。いかなる素性の者か。Jonathan Cott はつぎのように記述している。

A distant relation of her deceased husband and an even more distant kin of the Hearn.

Thirteen years older than her troubling grandnephew, Henry had already attended a Catholic commercial college, spoke several foreign languages, was conspicuously and almost exaggeratedly devout, and clearly ambitious. Mrs Brenane found him inordinately charming, and before long he had become her personal financial adviser—as well as principal beneficiary of her own investments—as he pushed his own business of importing goods from the East.<sup>(5)</sup>

ハーンがダーラムのカトリック学校に行かせられたのもモリニュークスとブレナン夫人と相談して

のことに推定される。ハーンは自分がブレナン夫人の遺産相続人と思っていたからである。

破産のため中途退学するしかなかった17才のハーンは今度は、確実にモリニュークスの指示のもとにロンドンの貧民街、“East End”に住んでいるCatherine Delaneyを頼った。Delaneyはもとはブレナン夫人の使用人であった。が夫は港湾労働者で他人の世話をする生活の余裕などあるはずがなかったと言えよう。

モリニュークスの最終の指示は、ハーン18才、1869年。アメリカへの移住である。妹のFrances AnnがCincinnatiに住んでいるので世話をしてもらえという責任放棄の態度である。非情であろう。この非情、卑劣さを前述のCottはつぎのようにあべいている。

Henry Molyneux... now back once more on his financial feet, decided to do something about Patrick Hearn once and for all. This time there was no need for him to persuade Sara Brenane; she was now seventy-five years old, and physically and mentally infirm.

In the spring of 1869, then Molyneux's sister, Frances Ann was living in, Cincinnati, Ohio, with her husband Thomas Cullinan, of Without consulting the head bog, Molyneux bought a one-way boat ticket to New York City, called the unmanageable nineteen-year-old to his office, presented him with the ticket and a small amount of money and instructed him find his way to Cincinnati....<sup>(6)</sup>

モリニュークスはハーンをアイルランドからイングランド、そしてアメリカに追放したのである。ハーンのモリニュークス個人はもとより周辺の人々、しいてはカトリック教に不信感をいだいたのは当然であろう。これらの不当、迫害、冷酷がハーンに逸脱のエートスをはらませる契機となったことは否定できないと言えよう<sup>(7)</sup>。今ひとつシンシナティで逸脱のエートスをなさしめた事件をおこした。Mattie Foleyとの結婚である。Elizabeth Stevensonは二人の出会いをつぎのように記述している。

Her name was Mattie Foley. She was the young cook in the harassed kitchen of the boardinghouse, a pretty young woman with a four-year-old son, and a story as rueful as Lafcadio's.<sup>(8)</sup>

ハーンみずからマティの人格、教育のなさ、描写力の巧みさを語っている。

She was a healthy, well built country girl, Whom the most critical must have called good looking, robust, and ruddy, despite the toil in a boarding-house kitchen, ... She had never to read or write, but possessed naturally a wonderful wealth of verbal description, a more than ordinarily vivid memory, and a gift of conversation which would have charmed an Italian improvisatore.

These things we learned during an idle half hour passed one summer's evening in her company on the kitchen stairs, ... to the weird earnestness of story-teller, the melody of her low, soft voice, and thralling charm of her conversatoin, we cannot attempt to do justice.<sup>(9)</sup>

今すこし補足するならこうなろう。マティはkentucky州の白人の農場主と黒人の奴隷との間に生まれた私生児であった。“mulatto”として社会から疎外され、軽侮され、よそ者として育ったと言えよう。貧しく、孤独な二人が出会い愛を育んだのも自然の成りゆきである。Stevensonはハーンとマティがこれまで社会の逸脱者として扱われて来た“anger”を互いに終末させ“warmth”, “vitality”, “fulfilmemt”の世界を求めさせたと解説している。

They had both been mistreated by this proud, indifferent society in which they had struggled and barely made their way to this place. They might help each other. His senses were stirred-and they had been starved. She offered warmth, vitality, fulfillment...

At twenty-two he felt only the force which drew him to the girl (She was four years younger than he was.) and anger at the social order which said they should hold apart.<sup>(10)</sup>

しかし、ハーンがつとめていた *Cincinnati Enquirer* の仲間からも反対者が出た。反対者の理由は必ずしも同一ではなかった。根源的に賛同をえられなかったのは法的差別、不平等が存在していたことである。人権が未だ確立していなかったのである。1861年から1877年までオハイオ州の法律では白人と黒人との結婚は禁止されていたのである。

An Ohio law, valid only between 1861 and 1877, prohibited the performance of a marriage between a white person and Negro.<sup>(11)</sup>

マティ自身すらも結婚には反対していた。州法をあらかじめ知っていて結婚に踏みきるとハーンが社会から排除され、他国者となると警告していた。

Mattie stated later, probably with truth that she wanred Hearn that he would be ostracized if he married her, and that she tried to prevent his insisting on the performance of the ceremony But he could not be stopped.<sup>(12)</sup>

結婚を強行すると“a legal fraud”を犯すことになることはハーンは十分知っていたにちがいない。この辺りのことを Stevenson はつぎのように解釈している。

Apparently he lied to secure a license. He broke with one friend Who refused to be a

witness. He was turned down by one minister before he secured the service of a second one. Presumably all the participants of the ceremony knew that according to the letter of the new marriage could not be a legal one. Yet Hearn bullied and pushed and persuaded and saw to it that the ceremony took place in proper form.... Hearn's closest friends knew the act. They shrugged it off, or ceased to be his friends. A low whisper gossip begun, but did not crackle into public attention for many months.<sup>(13)</sup>

しかし、離婚し新聞社も解雇された。当然、予期しえたことである。なぜ“a legal fraud”まで犯し、結婚したのであろうか。くり返すことになるがハーンの反逆、差別への忿怒、上層階級への抵抗と言ってよいであろう。白人と黒人との結婚を禁止したのは誰なのか。これまでマティ、ハーンを差別し、はぐれ者あつかいしていたのは誰なのか。Stevenson がすでに解説したように“*They had both been mistreated by this proud, indifferent society in which they had struggled and barely made their way to this place.*” 上流階級の人々であろう。しかもインクワイアラーの新聞社に圧力をかけた政治屋はいかなる階層に在る者であったか。ハーンの記事によるシンシナティの暗部、腐敗、不正への批判を許せざる政治屋と言えよう。ハーンはつぎの新聞社『*コマーシャル*』も辞め New Orleans に南下した。ここでマティの再婚について付言しておきたい。1878年、マティは再婚している。ハーンはマティとの結婚、離婚はもとよりニュー・オリンズではマティとの関係を一切、封印、隠蔽している。仮面の日常である。南部の白人優位社会、奴隷制度の容認の世界で根なし草、はぐれ者は仮面をつけるしかなかったと言えよう。しかし、“*Obsession*” 自己分裂、自己矛盾、自己迫害の内面は抑圧されつづけたのが実体であったと思われる。この *Obsession* から解放されるのが日本の学生に追放された理由を告白した時からと推察してよいであろう。

When I was a young man in my twenties, I had an experience very like yours. I had solved to take part of some people who were much disliked in the place where I lived. I thought that those who disliked them were morally wrong—so I argued boldly for them and went over to their side. Then all the rest of the people stopped speaking to me and I hated them for it.<sup>(14)</sup>

ハーンはマティとの結婚式をあげる。しかし白人の司祭に断われ、白人の出席もなし。やっと黒人の司祭を見つけ黒人の家で式をあげた。しかし、上流階級、政治屋の迫害、圧力、不正はハーンにとって耐えられなかったと思われる。逸脱した生活を正常化し、1890年に来日してからは逸脱ぶりから少しづつ離脱したように推察される。しかし、日本のやみくもな近代化の推進にともなうキリスト者の優越主義、上意主義に関して批判精神をもって対抗した。この対抗が西欧の宣教師に逸脱者、はぐれ者、異邦人と侮蔑された。しかし、ハーンの逸脱者としてのエートスは日本の近代化を再評価する際けっして欠かしてはならない視点となるであろう。つぎの論題はラフカディオ・ハーンとケルト

文化をとりあげることとしたい。ケルト文化を西欧文化の古層と考え、イングランド文学の衰退期になると必ずあらたなる文学生成の契機となる。

ハーン文学の主題は拙論で白人の上意主義、優越意識、キリスト教の排他主義への反逆から始まっていると言ひ、このエートスをケルト文化の関わりで論考するのがつぎの主題である。

## 注

- [1] Elizabeth Stevenson. *Lafcadio Hearn*, The Macmillan Company, New York. 1961. p. 262. ここで付言しておきたいことがある。ハーンはケルトの継承者である。ハーンの記述のなかで文学の特異性として “Irregularity” が提言されている。この逸脱はケルト文化の歴史的重なる exiles のなかで生成されたあの “balance”, “measure”, “patience” へのかたくなな拒否のなかで結実されたと言えよう。この拒否がアイルランドの再生、独立の土台となって推進していくのである。この検討はいずれあらためてすることにしたい。
- [2] 母 Rosa, 混血女の Mattie Foley, 妻の小泉節は学問はないが、ハーンの再話文学の土台となす語り手としては十分な才能をもっていたと言えよう。
- [3] 正規の幼等教育の他にサラ・ブレナン家の使用人（メイド）Kate からアイルランドの “fairy stories”, “folk saying”, “superstition” を聞き自然にケルト文化に馴染むようになる。Stevenson は同書のなかでつぎのよう記述している。

The child, listening to these Irish saying and stories had a mind reay for all wonders queernesses all exultations of impossible. (Ibid, p. 16)

- [4] Ibid, p. 15.
- [5] Jonathan Cott, *Wonclering Ghost*, A knoph, New York. 1990, p. 23.
- [6] Ibid, p. 34.
- [7] 1871年ブレナン夫人の訃報をモリニュークスから受けとる。しかし一切の人間関係を断つ。以後ハーンはアイルランドとの関わりを切り、exileの道程をたどることになるのである。
- [8] Stevenson, Ibid, p. 35.
- [9] Ibid, p. 35-36.
- [10] Ibid, p. 36-37.
- [11] Ibid, p. 29.
- [12] Ibid, p. 52.
- [13] Ibid, p. 52.
- [14] Ibid, p. 70.